vol.11　リディアンスケールの使い方について　～その 2～

では、vol.11、始めていきましょう。

引き続き、リディアンスケールについて学んでいきます。前回と同じく、トニックはF音、F リディアンで見ていきましょう。

さて、今回は、リディアンスケールの「指板上での把握の仕方」について考えてみたいと思います。

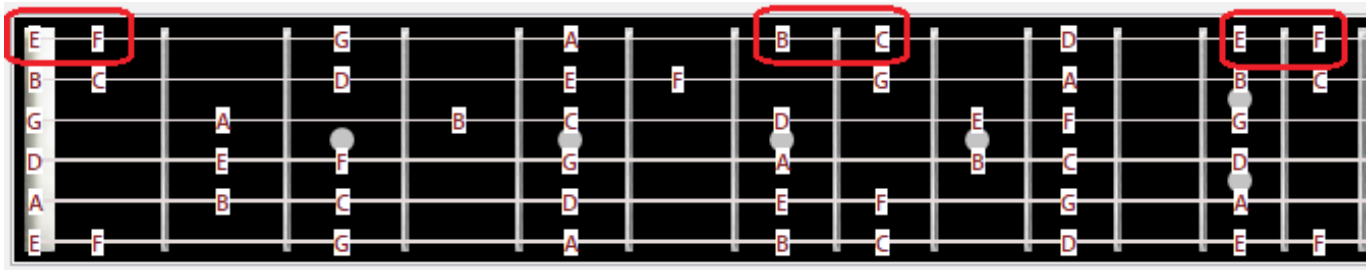
代表的なポジション自体はこれまで何度もやってきましたが、それとは少し違う観点からこのスケールを見てみましょう。

一般的に、多くのスケールは、そのスケールの特徴となる部分が、「二つの音が半音で接する部分」にあります。

リディアンで言うと、インターバルが、

tonic、M2nd、M3rd、♯4th、P5th、M6th、M7th、P8th(＝tonic)

なので、赤字で示した部分が半音の関係にある音ですね。



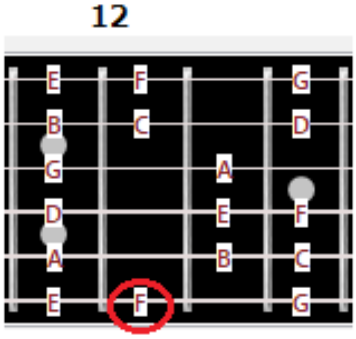
チャーチモードの内、メジャー系のモード・スケールは、4 度と 7 度に違いが出ているので、この 2 か所がこうなっている事がリディアンの特徴でもあります。

このリディアンから、例えば、4 度(♯4th)を半音下げて P4th にすると、それはアイオニアンになってしまいますし、7 度(M7th)を半音下げて m7th にすると、それはミクソリディアンでは無いですが、ドミナント 7th 系のスケールの様な形になってしまいます。

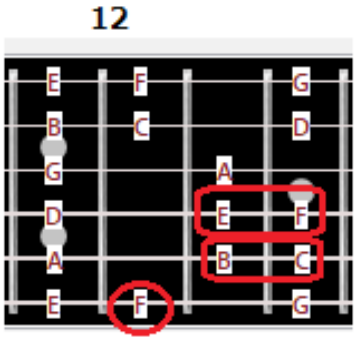
こう言った観点から、そのスケールにとっての重要な部分を抜き出し、そこを優先的に把握する、と言う方法をとってみましょう。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

では、具体的なポジションですが、いつもやっている、6 弦トニックのこのポジションがありますね。



赤丸の F 音から見て、先ほど挙げた、リディアンの特徴になっている「二音が半音で接する部分」の位置はこの様になっています。

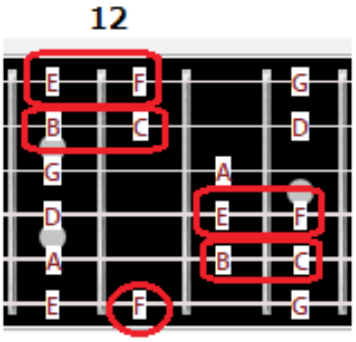


このポジションを基礎練習として弾く時は、トニックに中指を置くことを推奨していますが、実際の演奏時にどうするかは各自で決めてもらって構いません。

で、トニックである F 音にどの指を置いたとしても、B&C 音(♯4&P5th)、E&F 音(M7th&tonic)の両者の位置がすぐに見えて、すぐに弾ける様に、普段から意識して練習しておきます。

これらの音の把握は、単純にスケールトレーニングの際に意識するか、リディアン用にメニューを組むなりすれば、見えるようになるのにそう時間はかからないでしょう。

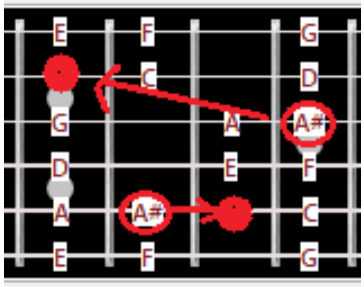
ちなみに、この後も出てくるのですが、ここのポジションでは 1、2 弦でも特徴的な音の部分が見やすいですね。



Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

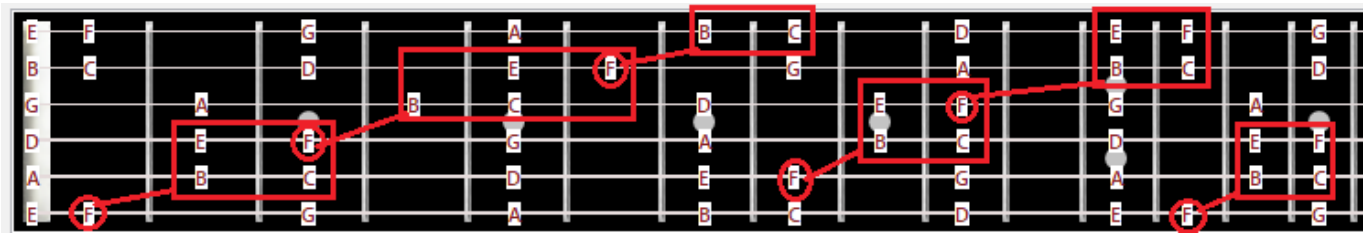
これが捉えられると、アイオニアンとの差異も見えるようになるので、スケール把握の補助になります。

※F アイオニアンと F リディアンの差異



(※A♯はＢ♭に読みかえて下さい)

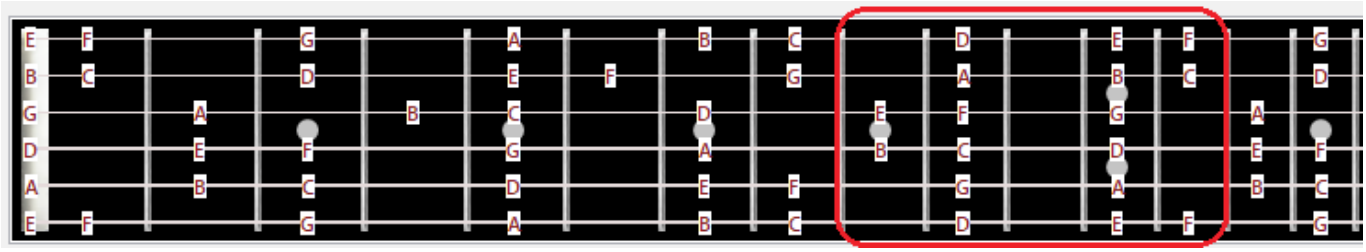
そうしてこの、「トニックから見た特徴的な音の位置」が掴めたら、それと同じ事を全ての弦にトニックを置いたパターンで見ていきます。



ギターの構造上、2～3 弦間を通る時に 1 フレット分ズレますが、大元の形はすべて同じです。

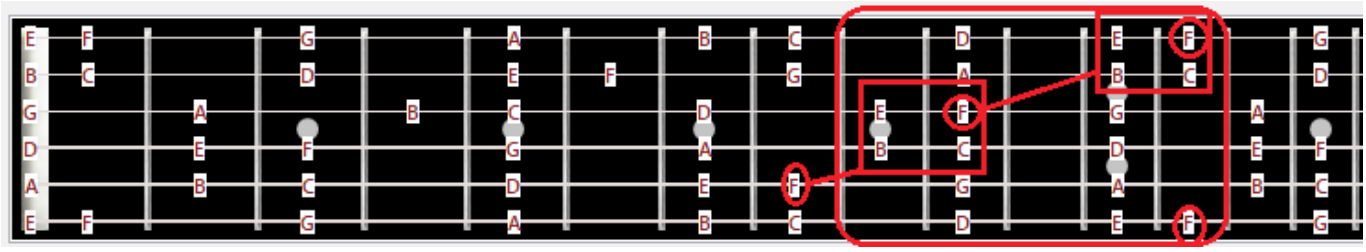
結局の所、F リディアンの場合、C メジャースケールと構成音が同じなので、これまでメジャースケールとして覚えてきたポジション内で、トニックである F 音と特徴的なポイントを探す、と言う方法もアリでしょう。

次に、今の話とも繋がりますが、他のモード・スケールの代表ポジション内で、目的のスケールを見るという方法があるのですが、例えば、6 弦ルートの D ドリアンでこのポジションがありますね。

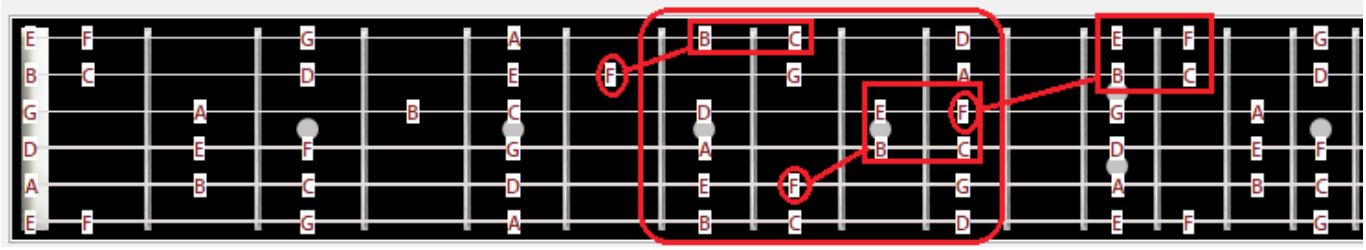


ここは D 音をトニックに見た D ドリアンとしても非常に弾きやすい場所ですが、このポジション内で F リディアンを見ても、かなり弾きやすい場所になっています。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved



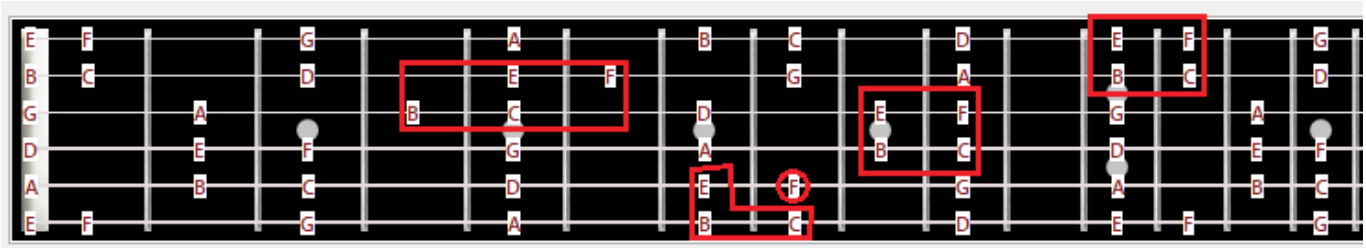
他にも、このCアイオニアンとして覚えたポジションもかなり見やすいですね。



ここでは二つのポジションしか出していませんが、他のポジションにも、最低でも弦2～4本分くらいの範囲で、非常に弾きやすい部分が存在するので探してみて下さい。

その時、一定の範囲で弾ききるのが難しくなったら、スライドなどで次の弾きやすいポジションに移動すると良いですね。

後は、リディアンの場合、そもそもトニックを見たフレットのすぐ後ろにM7th、さらに一本分低い弦の(ほぼ)同フレット帯に♯4th、P5thがある、と言う事も把握しておきましょう。



こう言った感じで、思考や把握の補助線となる見方を多数持っておくと、実際に演奏する時にポジションを思い出す事にリソースを使う必要が無くなり、反応が早くなりますので。

それでは、今回は以上になります。

今回の内容を素直に読むと、「スケールを覚えまくれ！」と言われている様な気がしてくるかもしれませんが、重要なのは、そのスケールを使ってメロディーを奏でられる事です。

余裕があるならば、覚えまくってもらっても良いのですが、最初はある程度ポジションを絞って、そこで重点的に演奏をしてみる事をお勧めします。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

前回の最後に載せたようなバッキングを使っても良いですし、ギター一本で弾いてみても良いですね。

C メジャースケールとの関係性から、わかりやすさのためにF リディアンで解説していますが、ギター一本で延々リディアンを弾きたい場合は、E リディアンで練習するのも 1 つの手です。

その場合、6 弦開放 E 音をボーンと鳴らし、その音を消さずにE リディアンスケールを色々と弾いてみると、響きが良くわかるでしょう。

スケール等の知識は、覚えただけでは非常に持ったいないので、常に実践してく事を心掛けていると、『知ってる』ではなく『使える』様になってきますので。

また次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved